

第6回新鋭俳句賞

正賞

「道づれ」三十句

芳山遊

道づれ

堅香子の花や嬬歌の山しづか
下萌えの丈に雀の跳ねるたり
風よりも蜂に揺れたる蓮華かな
分蜂の空に翅音の渦卷ける
女王蜂腹をぼるんと横たはる
流蜜の音を頼りにゆく春野
蜂飼ひは北へ向かはむ花は葉に
蜂の眼の昭和新山ふくらみぬ
囀と採蜜のみに暮るる日も
リラ冷えや岸を見せざる留萌川
アカシアの風を計りて野の昼寝
捨て蜜が最も甘し指を蟻
麦わら帽祖父も使ひし枝に掛く
蜂場は元野球場草いきれ
農小屋の門灼くるものとなり
朝採りのばいんばいんの西瓜切る
蝦夷路をくぐりて昏き雨宿り
蝙蝠の匂ふ闇まで蜜しぼる
団栗の径に熊鈴鳴り通し
また戻る顔して去りぬ北狐
道づれの浅葱斑と南下かな
最後まで眸そらさず罷退く
吸ひ殻も落葉もいれる燻煙器
視えてゐて遠き筑波嶺野分あと
老蜂を載みたるのみの帰郷かな
野の菊を添へて明るき蜂供養
鼻に眠らされては眠れざる
また別の蜂にすがりて凍てにけり
蜜匙に削る結晶冬来る
養蜂箱雪の厚さに護らるる